

令和6(2024)年度 事業報告書

「誠実で信頼される人に」
Become a Sincere and Reliable Person

すべては生徒のために
—生徒が輝く学校づくりを目指して—



学校法人 鈴鹿享栄学園

目次 Contents

はじめに	1
------	-------	---

I. 学校法人の概要

1. 建学の精神	2
2. 鈴鹿享栄学園の沿革	4
3. 役員	6
4. 評議員	6
5. 理事会・評議員会の開催状況	7
6. 経営方針	8
7. 環境整備	8
8. 生徒数	9
9. 教職員数	9

II. 事業の概要

1. 鈴鹿高等学校	10
2. 鈴鹿中等教育学校	16

III. 財務の概要

1. 資金収支計算書	22
2. 事業活動収支計算書	23
3. 貸借対照表	25
4. 有価証券	25
5. 財産目録	26
6. 借入金明細表	26
7. 財務比率	27

はじめに



1. はじめに

本学園は、平成26（2014）年、享栄学園から分離し鈴鹿享栄学園として、新しいスタートをきり11年が経過いたしました。法人分離は、各学校の特色や強みをより一層生かし、生徒、保護者、地域のニーズを把握し、さまざまな課題に対して迅速な決断と改革に取り組むとともに将来にわたる安心と明確な責任体制の確立を趣旨として行われ、この11年間でかなりの成果が挙げたと確信しています。

本学園は、少子化が今後さらに進み、就学人口が大幅に減少して行くなど厳しい時代を乗り越え、建学の精神「誠実で信頼される人に」に基づいた社会で生き抜く力を持つ優秀な人材を輩出する学園として発展し、将来にわたって存続しなければなりません。

また、教育を取巻く社会情勢は、大きく変貌してきており、グローバル化の進展、多様化する大学入試制度、高大接続改革等への更なる対応に対しては、即応、先取りした教学システムの構築、提供、さらに組織改革等を行う必要があります。

2. 経営方針

これらの環境認識のもと、令和6（2024）年度に、経営方針について全教職員が参画して「生徒、保護者、地域の満足度向上」、「安定性、持続性、発展性を担保できる経営の展開」、「全員参画型組織の構築」の3点であることを再確認しました。

また、令和7年度から今後の10年間を見据えた中期計画を作成しました。この中で、自己肯定感や幸福感など生徒と学校（教職員）一人ひとりのウェルビーイングの向上が大切であるとして、生徒・保護者が満足できる良好な教育内容及び教育施設環境の提供、並びにそれらを実現するための組織づくりを行うこととしています。

3. 令和6年度事業

経営方針に基づき高等学校及び中等教育学校の事業計画として盛り込んだ教学改革、生徒支援事業、進路支援事業等を着実に実行しました。

また、教学品質の向上のために高等学校コース制改革の完成及び中等教育学校の確立を受け、引き続き成果と課題の更なる検証に取り組み、両校の更なる魅力化をめざしての研究、時代の変化に即応した指導体制と教育環境の整備、優秀な教職員の確保と教職員研修体系の充実、進路実績の向上、クラブ活動の活性化、経営基盤の安定化、ガバナンスの強化、生徒活動募集の強化、危機管理体制の強化等を併せて実行しました。

以上

令和7年5月29日

理事長 渡辺 久孝

I. 学校法人の概要

1. 建学の精神

「誠実で信頼される人に」

Become a Sincere and Reliable Person

鈴鹿享栄学園の源流である享栄学園は、創立者の堀榮二が、米国で修得した実社会に役立つ教育の実践を目指し大正2年に「英習字簿記学会」として開塾し、同4(1915)年に、「有陰徳者その後、必享其栄」（陰徳ある者は、必ずその栄を享く）の精神を尊び名付けた享栄学園が認可された。誠実さを基にして生徒は教師を信頼し、教師はまた生徒を信頼することのできる教育の場にして、ここで培った信頼感を社会に広げたいと願った「誠実で信頼される人に」を建学の精神として確立し、次の具体的目標を示し、地域に根ざす学園を目指している。



1. あてになる人物になろう

あてになる人物とは、頼りになる人、信頼できる人、頼もしい人のことである。付和雷同しない思慮の深さと意志の強さをもつ人、和して動じない勇気をもつ人である。お互いに不信をいだかなければならないような社会ほど不幸な社会はない。現代人の危機は、人間がお互いの信頼性を欠いている点にあるのではなかろうか。

2. 働くことの喜びを知ろう

日本人は、本来勤勉な国民である。戦後の荒廃から立ち上がり、今日の経済的繁栄をもたらしたのは日本人の勤勉さの賜である。勤勉な資質の裏付けがあってはじめて、豊かさを享受することができ、生活にゆとりを持つことが可能となろう。われわれは自己の仕事を愛し、仕事に忠実であり、仕事に打ち込むことができる人でなければならない。

3. 全力をふるって事にあたる体験をもとう

勉学であれ、スポーツであれ全力を傾けて打ち込むことが望ましい。例えば、スポーツで、炎天下体力の限界ぎりぎりまで、強力な精神力で自己に打ち克つといった体験をすることが非常に貴重である。こうした体験は、本人の自信にもつながり、実社会に出ても大いに役立つことであろう。実社会でスポーツ選手が歓迎される所以もここにある。

4. 感謝の気持ちと畏敬の念をもとう

創立者は、感謝の念の強い人であった。仏教に帰依し、昭和5年(1930年)に享栄寺本堂を建立したのもこの感謝の念からであった。たえず不平不満を感じる人ほど不幸な人はない。小さな好意や親切にも感謝できる人は幸福である。感謝の念に裏付けられて社

会は明るくなり、健全な進歩が期待されるのである。また、われわれは生命の根源に対して畏敬の念をいだくべきである。われわれは自ら自己の生命を生んだのではない。われわれの生命の根源には父母の生命があり、民族の生命があり、人類の生命があり、宇宙の生命がある。ここにいう生命とは、単に肉体的な生命を指すのではない。われわれには精神的な生命がある。このような生命の根源に対する畏敬の念が真の宗教的情操であり、人間の尊厳と愛もこれに基づいて生ずるのである。

5. 正しく日本を愛し、国際的視野を広げる人になろう

創立者は、長らくアメリカに滞在し国際的視野を身につけ、技術的にはアメリカのものを多く導入したが、精神的には強く日本のよさにひかれ、国を愛する念が強かった。今後ますます進展する国際化時代を迎え、国際社会で活躍していくためには、正しく日本を愛し、その上で、国際的視野を広げ、異文化を理解し、人間愛に基づく広い視野をもって、国際社会の要請に応えていかなければならない。今日、世界において、国家に所属しないいいかなる個人もなく、民族もない。国家は世界において最も有機的であり、強力な集団である。個人の幸福も安全も国家によるところが極めて多い。自国の存在に無関心であり、その価値の向上に努めずして、その価値を無視したり、その存在を破壊しようとする者は自国を憎むものである。われわれは日本を正しく愛さなければならない。



[享栄]の由来

本学園に「享栄」の名称がついたのは、大正4(1915)年4月「享栄学校」として認可されたときからです。学園のアメリカ式実務教育に興味を持っていた名古屋市長阪本鈺之助氏(在任明治44(1911)年7月～大正6(1917)年1月)が創立者堀 榮二先生に名付け親を頼まれ「有陰徳者必享其栄」とお書きになったのが、もととなりました。

<名 称> 学校法人鈴鹿享栄学園

<法人設立> 平成26(2014)年4月1日

<設置学校> 鈴鹿高等学校  〒513-0831 三重県鈴鹿市庄野町1260
 鈴鹿中等教育学校  〒513-0831 三重県鈴鹿市庄野町1230



鈴鹿高等学校



鈴鹿中等教育学校

2. 鈴鹿享栄学園の沿革（平成26年3月までは、享栄学園の沿革を記載）

大正 2（1913）年	6月	英習字簿記学会として名古屋市中区南呉服町に発足
大正 4（1915）年	4月	坂本市長命名の「享栄学園」認可（KYOEI BUSINESS COLLEGEと称す。）
大正 7（1918）年	10月	実業学校令による乙種認可校となり、享栄貿易学校と校名変更
大正10（1921）年	12月	甲種商業学校として認可される
大正14（1925）年	4月	実業学校令による甲種認可校（5年）に昇格、享栄商業学校に校名変更
大正14（1925）年	9月	名古屋市瑞穂区汐路町の現校舎位置に移転、鶴舞公園前に享栄商業タイピスト学校独立
昭和19（1944）年	3月	財団法人享栄学園を設立、享栄女子商業学校に校名変更
昭和23（1948）年	4月	学制改革により享栄商業高等学校、享栄中学校として発足
昭和26（1951）年	3月	学校法人享栄学園となる
昭和29（1954）年	4月	享栄幼稚園設立
昭和37（1962）年	4月	享栄商業高等学校に工業課程を開設
昭和38（1963）年	4月	鈴鹿高等学校を三重県鈴鹿市に、普通科・商業科開校
昭和40（1965）年	3月	享栄中学校廃校
昭和41（1966）年	4月	鈴鹿短期大学を三重県鈴鹿市に開校家政学科
昭和42（1967）年	10月	享栄商業高等学校、校名を享栄高等学校と変更
昭和43（1968）年	4月	享栄高等学校に普通科開設
昭和44（1969）年	2月	鈴鹿短期大学に家政第3部が認可
昭和45（1970）年	1月	鈴鹿高等学校に定時制設置
昭和51（1976）年	4月	享栄商業タイピスト学校を享栄タイピスト専門学校に校名を変更し、専門課程・高等課程・一般課程を設置
昭和54（1979）年	9月	鈴鹿高等学校の定時制廃止
昭和58（1983）年	4月	享栄高等学校栄徳分校を愛知県長久手町に普通科開校
昭和59（1984）年	2月	鈴鹿短期大学に商経学科が認可
昭和60（1985）年	4月	享栄高等学校栄徳分校が独立、栄徳高等学校として普通科を開校
昭和60（1985）年	4月	享栄タイピスト専門学校を専門学校享栄ビジネスカレッジと校名変更
昭和61（1986）年	4月	鈴鹿中学校を三重県鈴鹿市に開校
平成元（1989）年	3月	鈴鹿短期大学、家政学科第3部廃止
平成 2（1990）年	3月	専門学校享栄ビジネスカレッジ商業実務一般課程廃止
平成 3（1991）年	4月	鈴鹿短期大学家政学科の名称を生活学科に変更
平成 5（1993）年	12月	鈴鹿国際大学国際学部国際関係学科設置認可
平成 8（1996）年	5月	鈴鹿短期大学商経学科廃止認可
平成 9（1997）年	12月	鈴鹿国際大学大学院国際学研究科及び国際学部国際文化学科認可
平成10（1998）年	4月	鈴鹿短期大学、校名を鈴鹿国際大学短期大学部と変更認可
平成12（2000）年	10月	鈴鹿国際大学国際学部観光学科設置認可

平成13（2001）年	8月	鈴鹿国際大学国際学部英米語学科設置認可
平成16（2004）年	4月	鈴鹿国際大学国際学部国際関係学科の名称を国際学科に変更
平成17（2005）年	3月	享栄高等学校通信制課程廃止認可
平成17（2005）年	3月	専門学校享栄ビジネスカレッジ商業実務高等課程廃止認可
平成18（2006）年	4月	鈴鹿国際大学短期大学部、校名を鈴鹿短期大学と変更
平成20（2008）年	4月	鈴鹿国際大学国際学部の名称を国際人間科学部に変更
平成22（2010）年	3月	専門学校享栄ビジネスカレッジ廃校
平成22（2010）年	11月	鈴鹿高等学校全日制課程商業科廃止認可
平成23（2011）年	2月	鈴鹿短期大学専攻科設置認可
平成23（2011）年	4月	鈴鹿短期大学生活学科の名称を生活コミュニケーション学科に変更
平成24（2012）年	4月	鈴鹿短期大学が鈴鹿国際大学郡山キャンパスへ移転
平成25（2013）年	11月	学校法人享栄学園 創立100周年 鈴鹿高等学校創立50周年
平成26（2014）年	3月	3法人（享栄学園、愛知享栄学園、鈴鹿享栄学園）に分離認可
平成26（2014）年	4月	法人分離により、学校法人享栄学園、学校法人愛知享栄学園、学校法人鈴鹿享栄学園発足
平成28（2016）年	11月	鈴鹿中学校創立30周年
平成28（2016）年	12月	鈴鹿享栄学園武道場完成
平成29（2017）年	3月	鈴鹿中等教育学校設置認可
平成29（2017）年	3月	鈴鹿享栄学園情報メディア教育センター完成
平成29（2017）年	4月	鈴鹿中等教育学校開設
平成31（2019）年	3月	鈴鹿中学校廃止認可
令和3（2021）年	11月	鈴鹿中等教育学校（旧鈴鹿中学校）創立35周年
令和5（2023）年	11月	鈴鹿高等学校創立60周年

以上

3. 役員（令和7（2025）年3月31日現在）

定数 理事5～9人、監事2人

現員 理事 7人、監事2人

	氏名	現職等
理事長	渡辺 久孝	鈴鹿中等教育学校長
理事	奥野 元洋	常務理事 事務局長
理事	堀 昌弘	鈴鹿高等学校長
理事	金子 一也	事務局長代理
理事	兼子 勝	学外理事
理事	真弓 清司	学外理事
理事	箕輪田 晃	学外理事

	氏名
監事	藤原 伸雄
監事	堤 達彦

- ※ 私立学校法により、学校法人の役員は、理事及び監事とし、代表権は、理事長にあると定められている。
 また、同法で、「学校法人に、理事をもって組織する理事会を置く。」「理事会は、学校法人の業務を決し、理事の職務の執行を監督する。」と定められており、理事会は、学校法人の決議機関となる。
- ※ 監事は、同法により、その職務を学校法人の業務及び財産の状況を監査することと定められ、理事会に出席し意見を述べ、監査報告書を作成し、理事会・評議員会に提出する。監事の選出に当たっては、理事、評議員又は学校法人の職員と兼ねてはならないとし、監査の公正を保っている。

4. 評議員（令和7（2025）年3月31日現在）

定数 11～19人

現員 15人

大西 正人	小松 貞則	林 千賀	鈴木 壽一
南条 雄士	豊田 恵理	河田 勝正	篠原 章矩
奥野 元洋	橋詰 福子	堀 昌弘	川又 俊則
樋口 哲也	高向 均	山部 芳則	

- ※ 評議員会は、学校法人の重要事項（予算及び事業計画、借入金、重要な資産の処分、寄附行為の変更等）について、理事長から意見を求められる諮問機関となる。

5. 理事会・評議員会の開催状況

寄附行為に基づき理事会、評議員会を開催しました。

令和6年度に行われた開催日と議案等は以下のとおりです。

	日程	議案等
理 事 会	令和6年4月1日	理事選任について 評議員選任について 理事長選任について 常務理事選任について 理事長の職務代行者の順位について 理事の担当業務について
	令和6年5月30日	令和5（2023）年度事業報告書（案）及び決算書（案）について
	令和6年6月27日	令和6（2024）年度第一回補正予算（案）について 学校法人鈴鹿享栄学園専任職員給与規程の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園常勤職員給与規程の一部改定について
	令和6年10月24日	評議員の選任について 令和7（2025）年度予算編成方針（案）について 学校法人鈴鹿享栄学園寄附行為の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園役員報酬規程の一部改定について
	令和6年12月19日	令和6（2024）年度第二回補正予算（案）について
	令和7年2月27日	中期計画（案）の作成について 鈴鹿高等学校学則の一部（教育課程）改定について 鈴鹿中等教育学校学則の一部（教育課程）改定について
	令和7年3月27日	令和7（2025）年度事業計画書（案）及び当初予算（案）について
評 議 員 会	令和6年5月30日	令和5（2023）年度事業報告書及び決算書について
	令和6年6月27日	令和6（2024）年度第一回補正予算（案）について
	令和6年10月24日	学校法人鈴鹿享栄学園寄附行為の一部改定について 学校法人鈴鹿享栄学園役員報酬規程の一部改定について
	令和6年12月19日	令和6（2024）年度第二回補正予算（案）について
	令和7年3月27日	令和7（2025）年度事業計画書（案）及び当初予算（案）について

6. 経営方針

1. 生徒、保護者、地域の満足度向上

- (1) 教学品質・体制の改革
 - ①高等学校コース制の完成、中等教育学校の確立を受けた成果と課題の検証
 - ②時代の変化に即応できる指導体制と教育環境の整備
 - ③優秀な教職員の確保と教職員研修体系の充実
- (2) 進路実績の向上
- (3) 生徒募集の強化
- (4) クラブ活動の活性化

2. 安定性、持続性、発展性を担保できる経営の展開

- (1) 経営基盤の安定化・・・財務体質の強化
- (2) 働き方改革に繋がる組織整備と教職員の処遇改善
- (3) 安全安心な学校づくり・ハラスメント対策など危機管理体制の強化

3. 全員参画型組織の構築

- (1) 高い目標への挑戦
- (2) 全員が参画し、全員で方策を決め、全員で実行する組織づくり
- (3) P D C A サイクルを活用した改革の継続

7. 環境整備

事業の必要性、緊急性、安全性に基づき実施事業を絞り込み、次の事業を行った。

(1) 空調設備工事 ベルアリーナ及びサブアリーナの新設 5号館の更新	36,333 千円
(2) 太陽光パネル設置工事 サブアリーナ及び武道館の屋上に設置	27,019 千円
(3) 体育館床改修工事 ベルアリーナ及びサブアリーナ	4,845 千円

8. 生徒数 (5月1日現在)

鈴鹿高等学校

(単位 人)

学年	令和6年度					令和5年度					増減				
	総合	探究	特進	他	計	総合	探究	特進	他	計	総合	探究	特進	他	計
1学年	248	70	36	0	354	229	61	36	1	327	19	9	0	△1	27
2学年	219	54	36	1	310	203	59	47	0	309	16	△5	△11	1	1
3学年	196	55	46	0	297	223	57	31	0	311	△27	△2	15	0	△14
合計	663	179	118	1	961	655	177	114	1	947	8	2	4	0	14

※「他」は入学と同時に留学のためコースに属さず

鈴鹿中等教育学校

(単位 人)

学年	令和6年度			令和5年度			増減		
	特進	医進	計	特進	医進	計	特進	医進	計
1学年	58	56	114	72	65	137	△14	△9	△23
2学年	67	67	134	47	70	117	20	△3	17
3学年	42	74	116	57	92	149	△15	△18	△33
4学年	58	88	146	39	82	121	19	6	25
5学年	39	81	120	62	47	109	△23	34	11
6学年	60	46	106	59	56	115	1	△10	△9
合計	324	412	736	336	412	748	△12	0	△12

9. 教職員数 (令和6(2024)年5月1日現在)

(単位 人)

部門	教員		職員		専任・常勤計	非常勤計	合計
	専任・常勤	非常勤	専任・常勤	非常勤			
鈴鹿高等学校	60	24	7	12	67	36	103
鈴鹿中等教育学校	47	26	3	3	50	29	79
合計	107	50	10	15	117	65	182

II. 事業の概要

1. 鈴鹿高等学校

1. 教学改革

(1) 教育充実のための取り組み

令和6年度は、令和2年度よりスタートした3つのコース改革（特進・探究・総合）の5年目となり、学年体制からコース体制移行への検証を改革委員会で行い、先々を見越した軌道修正、改善を加えながら各コースの完成度を高めてきた。これを繰り返すこと（PDCA）が生徒自ら考え、変化が厳しい社会を生き抜く力を養成（グラデュエーション・ポリシー：育成を目指す資質・能力に関する方針）し、生徒・保護者・地域の満足度向上に繋がった。

(2) 各コースの方針（カリキュラム・ポリシー：教育課程の編成及び実施に関する方針）

① 特進コース

3年生：特進集会や学校生活で後輩によき姿を示すことができた。部活動やインターンシップ・ボランティア活動をきっかけに進路目標を定めて取り組んだ。初めての2クラス運営で難しい部分もあったが、比較的落ち着いた学年で協力的な生徒が多かった。国公立合格に向けてひたむきに努力する姿を最後まで見せてくれたが、これまでを超える実績は残せなかった。

2年生：学習計画表を中心にスケジュール管理を行うことができ、昨年度よりも面談の回数を増やして生徒のサポートを行った。学校生活アンケートでは、90%以上が「充実している」と回答しており、目標が達成できた。1クラスの小規模集団であるため、多くの人の考え方・経験に触れることができるように、面談を学年団で行った。その結果生徒の進路に関する考え方が多様になった。

1年生：学習時間を固定化させて学校生活アンケートの回答が「充実している」90%以上を目標とした。その結果、97%が「充実している」であり、「クラスの雰囲気・居心地の良さは100%が肯定的な回答であった。模試においては、平均得点率に関しては達成できていないが、偏差値に関しては7月～1月にかけて大きく伸ばすことができた。保護者アンケートの「満足度」は100%が「そう思う」であり、目標を達成することができた。

② 探究コース

3年生：全体的に人間関係のトラブルは少なく、互いに思い合って他者を尊重できる生徒が多かった。学習・進路面では年内入試で合格をした3分の2の生徒が学習意識が低下し、雰囲気が良くない様子が目立った。探究活動は個人を中心に取り組んだが、グループで取り組む活動が少なかったため、様々な人との適切なコミュニケーション力を養う機会が少なくなってしまった。保護者アンケートの「満足度」は97.6%であった。

2年生：進路学習としてフィールドワーク（皇學館大学・伊勢方面）・OB・OG交流会、大学系統・分野別説明会を行った。探究活動として「問いを抱く力」「課題を発見する力」を養うためICT機器を用いたプレゼンテーション・ポスター発表に取り組

んだ結果、生徒の生き生きと活動する姿が見られた。プロジェクト型探究として、B級グルメのように地域とかかわりが持てる場を設定し、「協働する力」を養う機会を設けた。メディアにも取上げていただき、地元の洋菓子店で販売することができた。保護者アンケートの「満足度」は90%であった。

1年生：朝の小テスト（英単語・漢字・数学）を4月より行ったが、当初は勉強する姿が見られなかった。テストを繰り返すことで少しずつ対策に取り組むようになり、3学期には朝から勉強する姿が定着するようになった。考査・模試においても同様で、3学期には過去問を解くようになった。学習習慣を身につけさせることは今後も継続して取り組みたい。入学時より学習端末の利用回数・時間を多くとり、プレゼンテーションの機会を増やして「活用できる力」を養うことを目標とした。端末を扱うことに抵抗は少なく、情報収集する力に長けているので、今後は「分析する力」「より良い表現ができる力」をつける指導をしていきたい。また、探究活動を通して、小さな成功を積み重ねたことで自己肯定感を育成することができた。SNS上での問題行動が数件あったが穏やかな生徒が多く、トラブルの少ない学校生活が送れている。

③ 総合コース

3年生：学校行事や総合的な探究の時間等でコミュニケーション力を育み、「寛容」と「思いやり」を持った行動が多く見られた。クラブ活動ではチームの中心となって活躍し、全国・東海で活躍する生徒も増えてきた。また、大会会場に駆けつけて応援する姿も多くみられるようになってきた。校内では元気に挨拶する生徒が増えてきている。進学希望者の多くが指定校推薦・総合型選抜・学校推薦型の入試で第一志望の大学・短期大学・専門学校に合格した。就職希望者には、数学ⅠでSPIを指導する試験対策を行った結果、一次試験で全員が合格した。幼児教育クラスは子どもとの交流を通して自らの授業姿勢や取り組みを見直すことができコミュニケーション能力・文書能力向上につながった。まだ日本語が話せない外国籍の子どももいて、改めて英語等の外国語の学習指導の必要性を感じた。医療看護クラスでは、医療従事者の講演や実習を通じた医療体験から将来医療に従事する立場を理解できるようになった。

2年生：学校行事や授業・総合的な探究の時間では主体的かつ積極的に参加する生徒が多く見受けられた。修学旅行等ではお互いに思いやる行動・譲り合い等も見られた。クラブ活動では全国・東海で活躍する生徒が増え、クラブ活動に対する意欲がより高まり、元気に挨拶する生徒も増えてきた。進路決定においては、分野別進路学習を自分の希望分野に沿って深く行うことができ、自らの課題にも取り組むようになってきた

1年生：学校行事や授業・総合的な探究の時間では主体的かつ積極的に参加する生徒が多く見受けられた。しかしその反面受け身の生徒も目立ち二極化であった。クラブ活動では全国・東海で活躍する生徒が増えてきてクラブ活動に対する意欲が高まっている。反面クラブ生の問題行動も多く見られたことが今後の課題である。身だしなみや生徒のトラブル等で指導する場面も多かった。進路指導では分野別進路学習を行い、大学・専門学校・企業の方から学校案内・入試情報・仕事内容等の説明を受け、

進路決定に刺激を受けた。またOB・OGを招き、職業観と学生時代の取り組みについて話を伺った。先輩の話から進路に関するイメージが膨らみ、次年度の文理選択に活かすことができた。保護者アンケートの「満足度」は95%で目標を達成できた。

(3) 研修体制の確立

① 初任者研修

令和6年度初任者研修受講者 高校：5名 中等：3名

令和6年度2年目研修受講者 高校：3名 中等：3名

② 中堅研修

令和6年度中堅研修受講者 高校：0名 中等：3名

③ ICT教育研修の推進

各教科で授業の研修を行い、各教科工夫を凝らした授業展開ができた。

④ 先進校への視察

近畿大学付属豊岡高等学校・・・ICT教育推進校

東京都立富士高等学校・・・学習進路指導推進校

名古屋経済大学市邨学園高等学校・・・コース運営、特色ある教育学推進校

中京高校・・・コース体制、通信制運営推進校

⑤ 多様な受験形態に対応するための小論文・面接指導を向上させるための研修の実施

キャリアアドバイザー（鈴木先生）から小論文指導・志望理由書等の指導を受け、外部開催の小論文講座等の研修にも参加した。

2. 生徒支援事業

(1) 支援事業の充実

多様な表現活動と学習意欲を高めるカリキュラムの充実を図り、知識・技能の習得を基に、思考力・判断力・表現力を育成するための工夫を全教員・全教科に取り入れた。

① 基礎学力の徹底習得と多様な表現活動の充実

朝の漢字・数学・英語等の取り組みを継続して行った。

夏期講座・冬期講座・プロジェクト10・特進学習合宿を開催できた。

② 高大接続の拡大

鈴鹿大学（幼児教育）、皇學館大学（探究活動）、鈴鹿医療科学大学（看護医療系）と高大連携による事業を行うことができた。

③ 教育相談体制の整備

担任や学年団がカウンセラーと情報共有をスムーズに行い、対応を考えるためのいじめ防止対策委員会（ケース会議）を機を逃すことなく行った。

(2) ICT環境の整備および生徒用端末機器の利用推進

1年生が個人の学習端末を購入したので、各教科工夫を凝らした授業が展開できた。

(3) 教育のPDCAサイクルによる成果の可視化

授業アンケート（11月）・保護者アンケート（7月、12月）、学力分析によるPDCAで改善を目指した。また、教育目標の具体化・数値化を図り、より客観的な評価ができるようにした。

① 授業アンケート・保護者アンケートの実施

授業アンケートは、11月に全教員が行い、各自の指導改善に繋がっているか、また生徒の

学習改善につながっているか確認をした。

保護者アンケートは、7月・12月の保護者懇談会に実施して、学校の教育活動や学校運営の状況について保護者の満足度が90%を上回ることを目標としている。

＜令和6年度保護者アンケート結果＞

満足度 7月：そう思う55.0%、ややそう思う40.0% 計95.0%（昨年：94.9%）

満足度 12月：そう思う56.4%、ややそう思う37.7% 計94.1%（昨年：95.4%）

② 学力分析

特進コースでは、「模試分析会」を進路指導部と協働で開催し、学年コースと教科担当者との共通理解を深める取り組みをしている。今後、生徒の学力を伸ばし、進学実績を上げていくための取り組みとして、次年度も継続して実施する予定である。

③ 外部研修会による授業力量向上

外部で開催される指導力向上セミナー等に参加し各教科で研修を実施した。

(4) 国際交流の充実

国際的な視野を広げるために、英語の授業で他国の文化に焦点を当て、日本の文化と比較しながら、異文化理解を深める機会を増やし、毎週ネイティブスピーカーによる授業を全年で行った。短期留学生（2週間・5か月・10ヶ月）として5名が参加した。

＜令和6年度 留学実績＞

- ・夏季休業中2週間の留学（セブ島） 2名
- ・夏季休業中2週間の留学（カナダ・トロント） 1名
- ・夏季休業中4週間の留学（セブ島） 1名
- ・令和7年1月～5か月の留学（カナダ・トロント） 1名

＜令和6年度 2年特進コース研修旅行実績＞

- ・11月12日～16日（福島県・ブリティッシュヒルズ） 34名

3. 進路支援事業

確かな学力を定着させて進路選択を広げ、一人ひとりの進路希望を的確に把握した進路指導を推進した。

① 国公立大学合格 15名（特進 13名・探究 2名・既卒生0名）

昨年度 15名（特進 11名・探究 4名・既卒生0名）

② 私立大学合格

四年制大学合格者 61校 225名 昨年度 76校 287名

短期大学合格者 5校 11名 昨年度 7校 10名

専門学校合格者 30校 63名 昨年度 41校 80名

③ 就職内定者 46名（学校斡旋46名 自営1名 公務員0名 その他1名）昨年度 34名

4. 地域連携・地域貢献事業

地域の清掃活動に参加し、地域との共生を図った。また、生徒会をはじめ、各クラブが施設訪問やボランティア活動を積極的に行った。

① 地元地域清掃活動、地元小学校・中学校への行事参加、及び出前授業参加

- ・庄野地区清掃活動（5/26）高校23名、中等22名、保護者15名、教員3名 計63名参加
- ・庄野地区清掃活動（9/22）天候不順のため中止
- ・庄野公民館主催夏休み講座に美術部が参加、音楽祭に放送部が参加

- ・平田地区さくらまつり（3/29、3/30）22名・ボランティア部が参加
- ・出前授業：平田野中、創徳中、白子中・大木中、鼓ヶ浦中、千代崎中、内部中に参加

② 施設訪問及びボランティア活動の活性化

- ・ボランティア部によるペットボトルキャップ回収活動
- ・生徒会、ボランティア部による能登半島地震支援募金活動
- ・ボランティア部と有志の生徒が白子海岸の清掃活動に参加

5. 生徒募集・入試に係る事業

本学の教育方針をよく理解し、本学で学びたいという意欲が高い生徒を受け入れるために、あらゆる情報を多様な募集・広報活動で発信し、入学者の確保を図った。

① 入学者確保のための分析・戦略、及び推薦入試の募集活動強化

志願者数 3,469名（昨年度 3,554名 ▲85名）

入学者数 346名（昨年度 354名 ▲8名）

専願者数 223名（昨年度 235名 ▲12名）

② 広報活動の活性化（デジタルコンテンツを一層充実させる）

Web出願5年目で大きなトラブルもなく、昨年よりもスムーズであった。

③ 魅力ある広報イベントの企画

学校訪問：125中学校全てにパンフレット・鈴高通信等が配布できた。

塾訪問・資料発送：30塾訪問・320塾に資料発送して鈴鹿の魅力を発信できた。また、eisuの主要なところには理事長・校長・事務局長代理も同行いただき鈴鹿の本気度を示すことができた。

施設見学会：3回開催「鈴鹿の強味」「私学と公立の違い」が好評であった。

参加者 生徒 300名 保護者189名 計489名（昨年度 ▲27名）

塾説明会：2回開催（9/10、9/11）参加者100名（昨年度+1名）中等と同日開催

学校説明会：4日間8回開催定員80名設定で開催。

参加者 生徒469名、保護者410名 計879名（昨年度+278名）

進路説明会：中学校（26校）合同説明会（11会場）塾（3塾）私学展等で説明。

ZOOM説明会：10回開催。参加者260名（昨年度+46名）

クラブ見学会・相談会（2年前まではクラブ相談会）：56名参加（R4年度+24名）

特進コース説明会：11月23日開催 参加者54名（昨年度+16名）

運営は生徒・OB・OG中心で実施した。特進クイズや座談会などがあり、年々特進への関心が鈴鹿地区を中心に高まっている。

④ 中学校・塾との連携強化（学校訪問・塾訪問強化）

中学校訪問は入試対策部を中心に行い、今年度は塾訪問の強化を優先として掲げ、精力的に訪問できた。

⑤ 地域への啓発活動（学校通信等の発行）

県内殆どの中学校にパンフレット・鈴高通信を配布することができた。

⑥ 奨学生制度の宣伝

中学校訪問・塾訪問・説明会・広報イベントで、奨学金・就学支援金の説明をした。

⑦ ホームページ・インスタグラム・ショート動画のツールで鈴鹿高校の魅力を発信

行事ごとにホームページ・インスタグラムの更新を行い、鈴鹿の魅力を発信することが

できた。

6. 教職員の働き方改革

(1) 新たな総合型校務支援システムの導入による業務効率化のさらなる推進

新たなシステムの導入がスムーズに勧められ、ワークフローによる業務の効率化が図られた。今後は、さらなる事務作業のシステム化を検討していく。

(2) 教職員業務のスクラップ&ビルドの意識の醸成と実行

業務の継承および検討による改善

各種会議において効果的な業務を継承することの重要性が確認された。しかし、スクラップが劇的に進んだとはいえない。次年度以降の課題として残った。

注) ・SPI・・・多くの企業の採用選考で利用されている適性検査

2. 鈴鹿中等教育学校

中等教育学校としての高い価値の創造を目指して

1. 教学改革

(1) 三つの方針(スクールポリシー)の再定義

- ① アドミッション・ポリシー ② カリキュラム・ポリシー ③ グラデュエーション・ポリシー
令和7年度に向けて各部署の代表者が協議し、原案を作成することができた。
その原案をもとにさらに議論を深めることになっている。

(2) 中等教育学校の完成による成果と課題の確認と今後の展望創造(2年目)

中等教育学校としての取組の成果と課題をまとめ、新たな中期計画の策定につなげることができた。

(3) 学力向上のための授業力向上

- ① 生徒が主体的に学び、習慣的に家庭学習に取り組もうとする意欲の醸成を図る指導力の向上
各教科及び学年も協力し、個々の状況に応じた追指導等を実施することができた。
- ② 互見授業の促進と充実した授業研究活動の定例化
各教科において授業見学と授業中の生徒の様子の情報交換を行った。教科による頻度の差はあるものの、継続した取組となりつつある。
- ③ 教科会議の充実 → 指導と評価の一体化による授業改善と教科指導力の向上
→ 知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力のバランスのとれた育成
重点項目として、教科会議の充実を図ることができた。今後も、教科会議が生徒の力の育成に繋がるよう、教材研究、授業研究、入試問題の研究と多岐に亘る議題で実施していきたい。
- ④ BYAD(Bring Your Assigned Device)を導入した I C T 教育の推進
学年主導で進めることができた。次年度に向けて現状を踏まえ、教科・学年・分掌が効果的な活用に繋がるよう、実践及び研究を重ねていく。
- ⑤ 新たな10年に向けたプロジェクト発足と協議の推進
複数回にわたる関係者間の協議により、中等教育学校としての成果と課題が整理され、新たな中期計画(案)を策定することができた。

(4) 研修体制の確立

- ① 初任者研修の充実 系統的な初任者研修を継続し、教員としての資質を向上
研修監による講座は毎年資料もブラッシュアップされ、有意義な研修となっている。
初任者・2年目研修の経験者も相当数になり、現場への還元率は上がっている。
- ② 中堅研修 本校経験10～15年の教員による研究授業の実施
本年度の中堅研修は、英語、国語、社会の各教科で実施することができた。それぞれの教科に卓越した外部指導者をつけ、充実した内容となった。
- ③ I C T 研修 BYAD体制推進のための教科指導好事例の情報収集、研究
先進校を視察して情報共有を行った。先進的に校内で取り組む教員がその利便性と生徒にとって有益性を広げることが必要である。校内研修会などを通してさらに活用方法について認識を深めていく。
- ④ 進路指導力向上のための研修体制の充実
キャリアアドバイザーの力を借りて、学年主任を中心とした研修を実施した。

今後は主任以外の教員への研修体制の充実を図りたい。

⑤ 先進校への計画的視察の推進

I CT関連して、県内外の先進校2校を視察することができた。次年度以降の取組につなげていく。

⑥ 小論文・面接指導力向上研修の実施

個々の教員がアドバイザーによる助言を受け指導力の向上を図った。今後は培った知見を全体で共有できるような取組につなげていく。

⑦ 期首・期末面談において教員個々のニーズに応じた研修の確認と機会の提供

すべての教員と期首面談、期末面談を実施し、研修機会について紹介することができた。

(5) グローバル教育の推進

① 国際交流の充実(姉妹校生徒間のオンラインによる交流や交換留学による国際理解教育の実施)

新規にカナダ提携校に5ヶ月留学生徒を2人派遣した。オーストラリア姉妹校には16人派遣した。現在は、オンライン交流会等を計画中である。

② 海外研修旅行の見直し

シンガポール研修旅行(3年次)

希望者制海外研修[オーストラリア姉妹校・カナダ・セブ島集中英語研修]等(4年次)

ポストコロナのタイミングで世情等を鑑みながら新体制として海外研修制度を再開し、3年生全員参加のシンガポール・マレーシア研修を実施した。その中でマレーシアの姉妹校との生徒間交流ができた。また、4・5年生希望者向けにオーストラリア姉妹校研修、セブ島集中英語研修、カナダ提携校研修も実施することができた。

③ 海外大学進学・海外留学相談体制の充実及び留学生、帰国子女等の受け入れ

海外大学進学や中長期留学説明会を実施した。令和6年度、2学年生徒2名が留学中となっている。

(6) 総合的な学習の時間／総合的な探究の時間の充実

「総合的な学習の時間」(前期課程)から「総合的な探究の時間」(後期課程)へ6年制の特徴を生かした全教員による指導体制の継続及び取組向上に向けた外部専門家の導入

TSの取組は例年通り進めることができたが、その目的と運用方法は見直す時期ではあると考えている。

(7) 取組業績の学年間での継承と蓄積資産の有効活用

全国模試の結果が出るごとに職員会議で各学年の取組の振り返りと課題に関しての意見交換を定期的に行った。また、学年懇談会の資料を共有し各学年の取組を見える化している。

2. 生徒支援事業

(1) 学習習慣の定着および担任等とのコミュニケーションにClassiの活用することによる、セルフマネジメント力、タイムマネジメント力の育成

Classiだけではなく、紙ベースの手帳、計画表、学年独自の取組等も併用しながら、学年(学齢)に応じてセルフマネジメント力を育成している。

(2) いじめを許さない生徒集団の育成

入学式及びオリエンテーションで本校1年生にいじめを許さない姿勢を示した。学校全体でピンクシャツ運動に取り組み、また、毎学期、いじめ防止人権フォーラムを開催し、参加者がたいへん熱心に話し合う場とすることができた。

(3) 教育相談・カウンセリングの充実

不登校傾向の生徒や生徒間のトラブルに悩んでいる生徒に対する適切かつ迅速な対応と関係機関との情報共有

相談室を利用している生徒においては、学年・カウンセラーとこまめに情報共有できた。カウンセラーとつながりを持つことで、適切に学校外の機関とも連携できた。

(4) 性に関する教育の体系化

6ヵ年の計画を立て、それに基づいて実施し、生徒からも概ね好評であった。講師との日程が調整できず次年度に持ち越しとなった学年もあるので、次年度早々に計画、実施したい。

(5) BYAD導入を考慮した情報モラル指導の強化(SNSトラブル防止啓発のための講演会等実施)

KDDI、警察署を招き講演会を実施した。SNS等インターネットを介したトラブルにあわないよう具体的な事例を通して啓発できた。

(6) 生徒会活動の活性化

生徒の要望や意見を受け止め、生徒が主体的により良い学校づくりに参画

鈴青祭体育の部、文化の部とも生徒会執行部が企画力、指導力を発揮し、充実した学園祭とすることができた。

また、生徒会からの要望事項については学園として丁寧に説明して回答した。

(7) 資格取得支援等へのチャレンジの推奨(英語検定や漢字検定などの資格取得を奨励し表彰)

37人が高い資格を取得し表彰された。そのうち、英検1級が1人(2年生)、準1級1人(1年生)が含まれている。

(8) 生徒の主体的な活動の奨励

ときめきサポート制度や各種コンクール等外部行事への参加奨励と社会性の涵養

ときめきサポート制度には11団体の応募があり、9団体が採用された。ブックトレードや模擬国連、ロボット競技など、昨年度から引き続きグレードアップした取組を継続し、充実した活動となっている。また、個人として音楽コンクールに出場し、高い評価を受ける生徒も出てきている。

(9) SGSS(英語力のある生徒による英字新聞作成等)の活動充実

主としてネイティブ教員の熱心な指導の下、英字新聞の発行や所属生徒の各種コンテストに参加した(県作文・スピーチ各コンテスト3位入賞)。

(10) 小論文・面接指導への外部人材の導入

昨年度より1名増の体制で指導にあたることができた。生徒は熱心に指導を受け、成果を上げた。

(11) クラブ活動の支援

各クラブの予算執行を確実に支援した。また、ユニフォームの刷新など、高額な予算申請についても適切に対応することができた。

(12) 生徒防災リーダーの育成支援

4年生2名の生徒が、県教委主催の学校防災ボランティア事業に参加し、能登へ赴き、被災地の現状から学んだ。さらに、年度末には学んできた内容を校内で報告した。次年度はメンバーの拡大を図りたい。

(13) 効率的かつ効果的なスクールバスの運行に向けた成果と課題の整理

おおむね運行計画に基づき実施することができたが、運行委託業者への連絡不備による運

行のみだれが生じたことがあった。連絡体制の確認を徹底し、再発防止を行うとともに万が一のトラブル時にも的確にフォローできる仕組みを検討する。なお、次年度は、津・亀山便、亀山便の2路線を統合する。

3. 進路支援事業

(1) 進路保障

- ① 大学入試実績の向上、難関国公立大学20名以上、国公立大学及び有名私立大学50名以上
東京・京都・大阪・名古屋・九州・東京科学大など難関国公立大学は8名。国公立大学合格総数は34名。有名私立大学は早慶・MARCH・関関同立など50名という結果であった。
- ② 各学年の模擬試験等のデータ分析を学校全体で共有、協議し、日常的な指導の充実を促進
模試ごとに結果を職員会議で共有することができた。また具体的な指導の取組についても共有できている。

(2) キャリア教育の充実

① キャリア教育の体系化

体験から学ぶ(1年次)、職業を知り、職業観・労働観を養う(2,3年次)、
学部・学科を知る(4年次)、志望学部・学科・大学を明確にする(5年次)

体系化については完成を見た。目標とベストプラクティスから構成されており、各学年のガイドラインとする。

2年生全員による職場体験を初めて実施した。この職業を知り自分の適性を考えることにより大学を含めた将来のキャリアについて意識することになり、より自分の将来のキャリアを考える体系的な学びにつながった。生徒が将来の目標を明確に見いだせることができる取組を継続していきたい。

② 教材ENAGEEDを活用した幅広い視野の育成

幅広い視野の育成につながる探究活動(TS)やキャリア教育の充実による指導を充実させたことによりENAGEEDを使用せずとも指導を実施することができるようになった。そのため、今後はENAGEEDの活用を終了する。

③ 医学科進学者のための医系進学者育成プログラムの実施

年3回プログラムを実施することができた。次年度以降も継続していく。

④ 小論文・面接指導體制の充実

外部人材の導入など指導體制の充実

昨年度より1名増の体制で指導にあたることができた。入試結果からも充実した指導となっていることがうかがえる。

(3) 外部の優れた人材の活用

大学教員や地域の事業主、卒業生等による講演会の実施

地域の事業主、卒業生による講演会を複数回実施することができた。今後協力して頂ける地域の事業主を増やしていき講演会を充実させていきたい。

(4) 皇學館大学との連携事業の実施

本年度は中等教育学校として直接的な連携はなかったが、学園全体としては研修体制推進のための支援を得ている。

4. 地域連携・地域貢献事業

(1) 県内産業の魅力を知る探究学習

県内企業経営者等のゲストティーチャーを招聘したキャリア教育と連動させた取組の実施
株式会社SANKEIや建設会社の代表などによる講演会を実施することができた。

今後、他の経営者を紹介してもらいより充実させていきたいため、現在つながりのある経営者と積極的に交流し、生徒への還元を図りたい。

(2) 地域清掃・通学路清掃活動の実施

通学路や学校周辺の清掃(空き缶やごみ拾い)等生徒の主体的活動、地域住民との協働の推進
学校の立地する地域の清掃活動にボランティアとして25名の生徒が参加し、通学路を含む学校周辺のさらなる美化に携わった。

一方で、地元自治会の協力により、正門前の横断歩道の白線を迅速に引き直してもらうことができた。

(3) 生徒のボランティア活動の推進

地元学童保育所等への訪問交流を実施(生徒会・科学部・吹奏楽部等)

三重県障がい者スポーツ大会卓球、鈴鹿スカイフェスタ、津シティマラソンの各ボランティアへの応募、ボランティアの集いへの応募をそれぞれ募り、実際に希望生徒が参加した。
吹奏楽部が学校近隣地域主催の弁天山まつりで演奏を披露した。

5. 生徒募集・入試に係る事業

(1) 受験者数及び専願率の向上を目指した取組の成果と課題の分析

残念ながら受験者減、専願率は横ばいとなってしまったが、3月には入試広報戦略会議を立ち上げ、今年度広報の成果と課題の詳細分析を行い、次年度の新たな取組計画につなげた。

(2) 医進・選抜コース、特進コースそれぞれの魅力化・特色化を図る研究・議論・校内研修会の実施

各コースにおける魅力化・特色化に係る、各学年、教科、分掌における議論を続けることができた。その中では英語科から医進講座の新提案もあった。しかし、全体の研修会を持つことまでにはいたらなかった。

(3) 説明会等イベントの充実

① あそびとまなびの体験ラリーの実施

昨年度に続き午前午後に分け事前予約を行うことに加え、講座ごとの事前予約も実施した。
242組の600名を超える参加となり好評を得た。

② 説明会等すべての機会において丁寧な対応をすることにより児童・保護者の参加者数及び満足度の向上

参加保護者からは生徒の姿をもっと見たいという要望があるので、説明会やイベントでは1年生インタビューや海外語学研修説明など在校生徒による活動の場面をより多く取り入れた。それとともに、一人ひとりに丁寧に應對し、参加者が必要とする情報を伝えた。その結果、アンケートではおおむね好評を得た。次年度には、さらなる生徒の活躍を検討している。

(4) 広報活動の一層の充実

① ホームページの新着情報を適宜更新し、生徒の学校生活の一端を広く発信

ホームページトピックスの更新数は3月上旬までで132回である。今後も適宜学校の情報を発信する。

② 学校行事等についてメディアへ積極的に発信

年度後半よりインスタグラムでの広報活用を開始した。現在週2回ペース程の更新を行っている。今後はWebページ以外のソーシャルメディア活用を目指し、強化していく。

12月にはFM三重での私立中特番に生徒会役員生徒と合同で参加し、聴取者より好評を得た。その他ポスティング広告の活用も行ったが効果は限定的だった。

③ キャッチーで時宜にかなった学校案内リーフレットおよびポスターの作成

今年度は美術部と協力し、リーフレットの表紙をイラスト化したり、中面に漫画を取り入れたり、他校では例を見ない広報物を自前で作成することができた。配付するとすぐに読んでもらえるので、小学校中低学年にもアピールできた。

6. 教職員の働き方改革

(1) 新たな統合型校務支援システムの導入による業務効率化のさらなる推進

新たなシステムの導入がスムーズに進められ、ワークフローによる業務の効率化が図られた。今後は、さらなる事務作業のシステム化を検討していく。

(2) 教職員業務のスクラップ&ビルドの意識の醸成と実行

業務の継承および検討による改善

各種会議において効果的な業務を継承することの重要性が確認された。しかし、スクラップが劇的に進んだとはいえない。次年度以降の課題として残った。

7. 創立40周年(令和8[2026]年)記念事業の準備

(1) 記念講演講師の選定及びその他記念事業に向けた準備

古生物学者・恐竜学者の真鍋真国立科学博物館副館長に講演の講師を依頼することができた。また、創立40周年記念事業準備委員会を発足させ、記念事業の会場等についても検討を進めた。

(2) 本館エレベータ設置に向けた検討

施設設備計画会議において、予算の算出や寄付の募集、設置場所についての検討を進めている。

III. 財務の概要

1 資金収支計算書

資金収支計算書は、会計年度の教育・研究その他の活動に対応するすべての収支内容並びに支払資金の収支のてん末を明らかにしたものです。

(単位 千円)

		科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
収入の部		学生生徒等納付金収入	909,267	904,149	5,118	99.4	
		手数料収入	63,675	62,427	1,248	98.0	
		寄付金収入	2,930	2,452	478	83.7	
		補助金収入	630,839	634,077	△ 3,238	100.5	
		資産売却収入	0	0	0	—	
		付随事業・収益事業収入	13,857	14,848	△ 991	107.2	
		受取利息・配当金収入	736	1,537	△ 801	208.8	
		雑収入	25,794	25,706	88	99.7	<前受金収入> ・入学金等増 4,208千円収入増
		借入金等収入	0	0	0	—	
		前受金収入	177,450	181,658	△ 4,208	102.4	
		その他の収入	80,184	731,354	△ 651,170	912.1	<その他の収入> ・特定資産取崩、預り金増 650,654千円収入増
		資金収入調整勘定	△ 215,533	△ 218,652	3,119	101.4	
	前年度繰越支払資金	1,007,065	1,007,065	0	100.0		
	収入の部合計	2,696,264	3,346,621	△ 650,357	124.1		
支出の部		科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
		人件費支出	1,119,749	1,113,035	6,714	99.4	
		教育研究経費支出	247,978	240,799	7,179	97.1	<施設関係支出> ・太陽光バ 社設置事業科目振替等 27,179千円支出増
		管理経費支出	77,693	75,495	2,198	97.2	
		借入金等利息支出	6,641	6,638	3	100.0	
		借入金等返済支出	87,359	87,358	1	100.0	<設備関係支出> ・太陽光バ 社設置事業科目振替等 26,411千円支出減
		施設関係支出	38,169	65,348	△ 27,179	171.2	
		設備関係支出	31,129	4,718	26,411	15.2	
		資産運用支出	24,418	672,608	△ 648,190	2754.6	<資産運用支出> ・特定資産計上増 648,190千円支出増
		その他の支出	89,269	42,612	46,657	47.7	
		小計	1,722,405	2,308,611	△ 586,206	134.0	
		予備費	0	0	0	—	<その他の支出> ・預り金の減 47,098千円支出減
	資金支出調整勘定	△ 18,550	△ 23,254	4,704	125.4		
	翌年度繰越支払資金	992,409	1,061,264	△ 68,855	106.9		
	支出の部合計	2,696,264	3,346,621	△ 650,357	124.1	<資金支出調整勘定> ・期末未払金の減 4,706千円支出減	

2. 事業活動収支計算書

事業活動収支計算書では、当該会計年度の諸活動に対応する事業活動収入・支出の内容および基本金組入後の均衡の状態を明らかにします。収支を計上のなものと臨時的なものに、さらに経常的な収支を教育活動と教育活動外に分けて把握することができます。

(単位 千円)

	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)		
教育活動	収入の活動	学生生徒等納付金	909,267	904,149	5,118	99.4	<学生生徒等納付金> ・授業料補助金による減 5,769千円収入減
		手数料	63,675	62,427	1,248	98.0	
		寄付金	2,930	3,201	△ 271	109.2	<経常費等補助金> ・地方公共団体補助金増 3,238千円収入増
		経常費等補助金	628,339	631,577	△ 3,238	100.5	
		付随事業収入	13,857	14,848	△ 991	107.2	<人件費> ・教員人件費等 7,010千円支出減
		雑収入	25,794	25,706	88	99.7	
	教育活動収入 計	1,643,862	1,641,908	1,954	99.9		
	支出の活動	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	<教育研究経費> ・光熱水費増や事業削減・見直等 6,227千円支出減
		人件費	1,143,192	1,136,182	7,010	99.4	<管理経費> ・事業削減・見直等 2,264千円支出減
		教育研究経費	415,850	409,623	6,227	98.5	
		管理経費	80,613	78,349	2,264	97.2	
		徴収不能額等	0	0	0	—	
教育活動支出 計	1,639,655	1,624,154	15,501	99.1			
教育活動収支差額		4,207	17,754	△ 13,547	—		
教育活動外	収入の活動	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
		受取利息・配当金	736	1,537	△ 801	208.8	
		その他の教育活動外収入	0	0	0	—	
	教育活動外収入 計	736	1,537	△ 801	208.8		
	支出の活動	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
		借入金等利息	6,641	6,638	3	100.0	
その他の教育活動外支出		0	0	0	—		
教育活動外支出 計	6,641	6,638	3	100.0			
教育活動外収支差額		△ 5,905	△ 5,101	△ 804	—		
経常収支差額		△ 1,698	12,653	△ 14,351	—		
特別収支	収入の活動	科目	予算	決算	差異	予算比 (%)	
		資産売却差額	0	0	0	—	
		その他の特別収入	2,500	3,588	△ 1,088	143.5	
	特別収入 計	2,500	3,588	△ 1,088	—		
	支出の活動	資産処分差額	373	806	△ 433	216.1	
		その他の特別支出	0	0	0	—	
		特別支出 計	373	806	△ 433	216.1	
特別収支差額		2,127	2,782	△ 655	—		

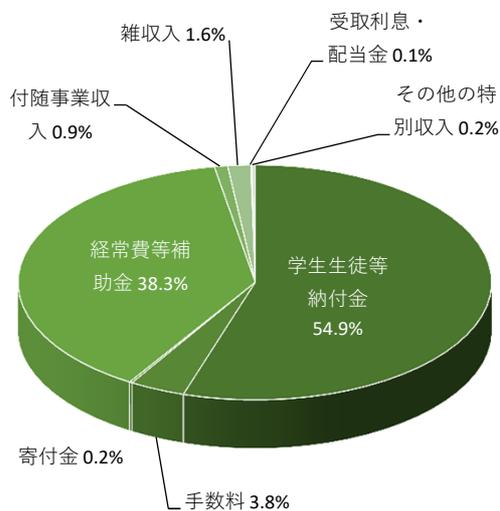
(単位 千円)

科目	予算	決算	差異	予算比 (%)
〔予備費〕	0		0	—
基本金組入前当年度収支差額	429	15,433	△ 15,004	—
基本金組入額合計	△ 156,654	△ 22,412	△ 134,242	—
当年度収支差額	△ 156,225	△ 6,979	△ 149,246	—
前年度繰越収支差額	△ 1,917,136	△ 1,917,136	0	—
基本金取崩額	0	5,050	△ 5,050	—
翌年度繰越収支差額	△ 2,073,361	△ 1,919,065	△ 154,296	—

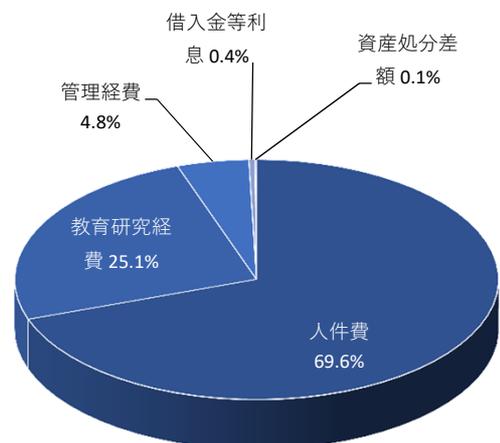
(参考)

事業活動収入 計	1,647,098	1,647,033	65	100.0
事業活動支出 計	1,646,669	1,631,598	15,071	99.1

事業活動収入の構成比



事業活動支出の構成比



3. 貸借対照表

貸借対照表は、令和7（2025）年3月31日現在の財政状況を示しています。

(単位 千円)

科目	本年度末	前年度末	増減	前年比 (%)
資産の部				
有形固定資産	2,392,349	2,488,865	△ 96,516	96.1
特定資産	1,290,948	1,266,581	24,367	101.9
その他の固定資産	31,364	35,475	△ 4,111	88.4
流動資産	1,086,361	1,075,936	10,425	101.0
資産の部合計	4,801,022	4,866,857	△ 65,835	98.6
科目	本年度末	前年度末	増減	前年比 (%)
負債の部				
固定負債	701,769	763,705	△ 61,936	91.9
流動負債	414,196	433,528	△ 19,332	95.5
負債の部合計	1,115,965	1,197,233	△ 81,268	93.2
純資産の部				
基本金				
第1号基本金	5,494,121	5,476,760	17,361	100.3
第4号基本金	110,000	110,000	0	100.0
繰越収支差額	△ 1,919,064	△ 1,917,136	△ 1,928	100.1
純資産の部合計	3,685,057	3,669,624	15,433	100.4
負債及び純資産の部合計	4,801,022	4,866,857	△ 65,835	98.6

4. 有価証券

① 総括表

(単位 円)

	当年度 (令和7 (2025) 年3月31日)		
	貸借対照表計上額	時 価	差 額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	291,912,470	354,129,164	62,216,694
(うち満期保証目的の債券)	(0)	(0)	(0)
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	249,786,500	240,890,000	△ 8,896,500
(うち満期保証目的の債券)	(0)	(0)	(0)
合 計	541,698,970	595,019,164	53,320,194
(うち満期保証目的の債券)			
時価のない有価証券	1		
有価証券合計	541,698,971		

② 明細表

(単位 円)

種類	当年度 (令和7 (2025) 年3月31日)		
	貸借対照表計上額	時 価	差 額
債券	249,786,500	240,890,000	△ 8,896,500
株式	1,730,000	1,804,600	74,600
投資信託	290,182,470	352,324,564	62,142,094
合 計	541,698,970	595,019,164	53,320,194
時価のない有価証券	1		
有価証券合計	541,698,971		

5. 財産目録 (令和7(2025)年3月31日現在)

(単位 円)

科目	金額	科目	金額
基本財産	2,409,453,094	貯蔵品	409,764
土地	154,713,221	前払金	242,550
建物	1,997,485,260	立替金	42,600
構築物	100,550,190		
教育研究用機器備品	50,621,648		
管理用機器機器備品	1,584,386		
図書	87,393,812	資産総額	4,801,021,560
車輛	1	借入金	654,201,120
電話加入権	661,423	退職給与引当金	131,767,500
ソフトウェア	16,443,153	未払金	24,061,231
		前受金	181,657,800
運用財産	2,391,568,466	預り金	124,219,586
借地権	14,259,740	仮受金	57,134
未収入金	24,401,717		
引当特定資産	1,290,948,200	負債総額	1,115,964,371
有価証券	1		
現金・預金	1,061,263,894	正味財産 (資産総額 - 負債総額)	3,685,057,189

6. 借入金明細表

令和6(2024)年4月1日から令和7(2025)年3月31日まで

(単位 円)

借入先		期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	利率	返済期限	摘要
長期借入金	市中金融機関	百五銀行	352,500,000	0 ^(※)	30,000,000	0.36%	令和18年12月31日	用途：図書館、武道場整備資金 担保：鈴鹿高校・中等教育学校の校地・校舎
		百五銀行	301,701,120	0 ^(※)	54,858,240	1.65%	令和12年6月30日	用途：鈴鹿高校校舎 体育館整備資金 担保：鈴鹿高校・中等教育学校の校地・校舎
		小計	654,201,120	0	84,858,240	569,342,880		
	計	654,201,120	0 ^(※)	84,858,240	569,342,880			
短期借入金	返済期限が1年以内の長期借入金		87,358,240 ^(※)	84,858,240	87,358,240			
	計	87,358,240 ^(※)	84,858,240	87,358,240	84,858,240			
合計		741,559,360 ^(※)	84,858,240	87,358,240 ^(※)	654,201,120			

(※) 長期借入金から短期借入金への振替額である。

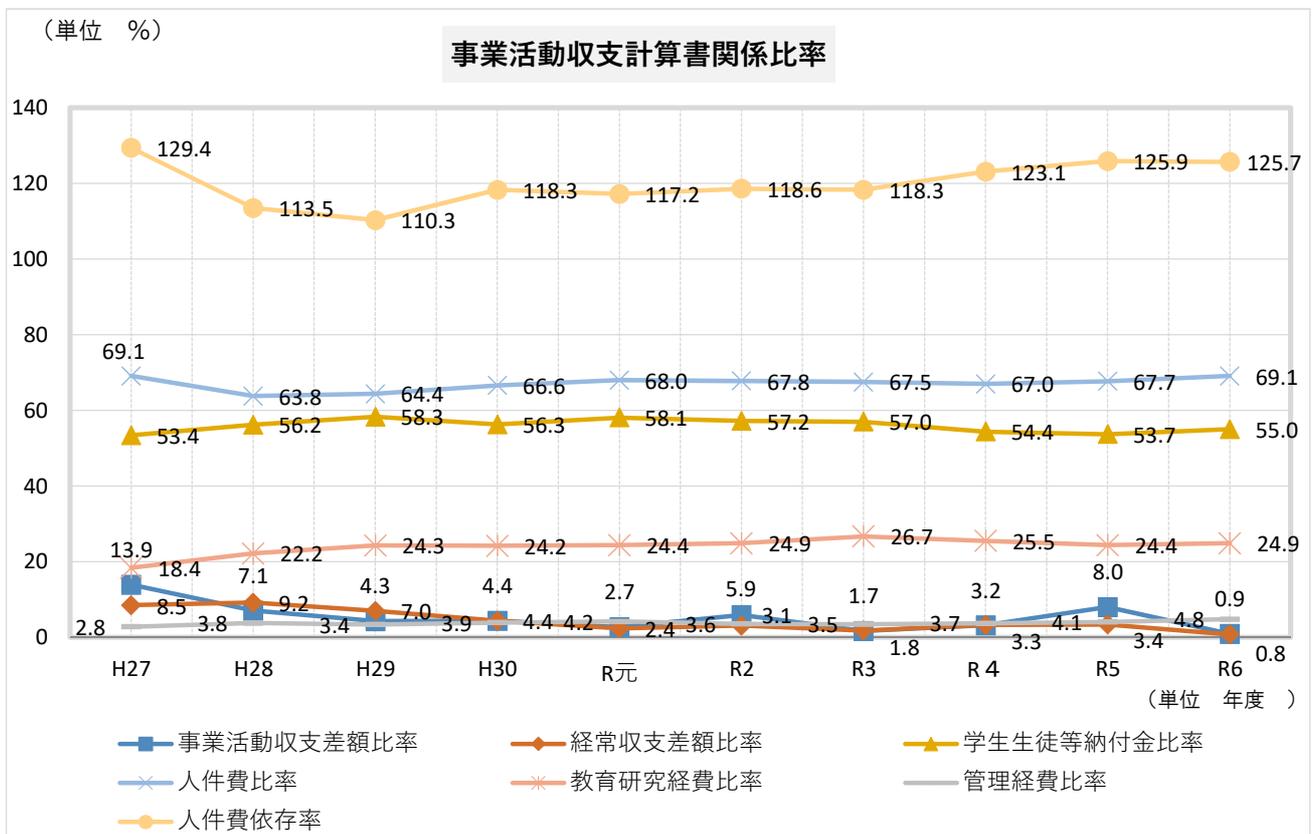
7. 財務比率

事業活動収支計算書関係比率

(単位 %)

分類	比率名	算式	本学園		全国平均	評価指標
			第2回補正	決算		
経営状況はどうか	事業活動収支差額比率	基本金組入前当年度収支差額 ÷ 事業活動収入	0.0	0.9	2.4	↑
収入構成はどうなっているか	学生生徒等納付金比率	学生生徒等納付金 ÷ 経常収入	-	55.0	52.7	～
	寄付金比率	寄付金 ÷ 事業活動収入	-	0.3	3.9	↑
	補助金比率	補助金 ÷ 事業活動収入	-	38.5	34.9	↑
支出構成は適切であるか	人件費比率	人件費 ÷ 経常収入	69.5	69.1	63.0	↓
	教育研究経費比率	教育研究経費 ÷ 経常収入	25.3	24.9	29.5	↑
	管理経費比率	管理経費 ÷ 経常収入	4.9	4.8	7.2	↓
収入と支出のバランスはとれているか	人件費依存率	人件費 ÷ 学生生徒等納付金	125.7	125.7	119.5	↓
	経常収支差額比率	(経常収入 - 経常支出) ÷ 経常収入	-	0.8	△ 0.1	↑
	教育活動収支差額比率	教育活動収支差額 ÷ 教育活動収入計	-	1.1	△ 1.0	↑

評価指標 ↑ 高い値が良い 全国平均：『令和5年度版「今日の私学財政」高等学校・中学校・小学校編』（日本私立学校振興・共済事業団）
 ↓ 低い値が良い



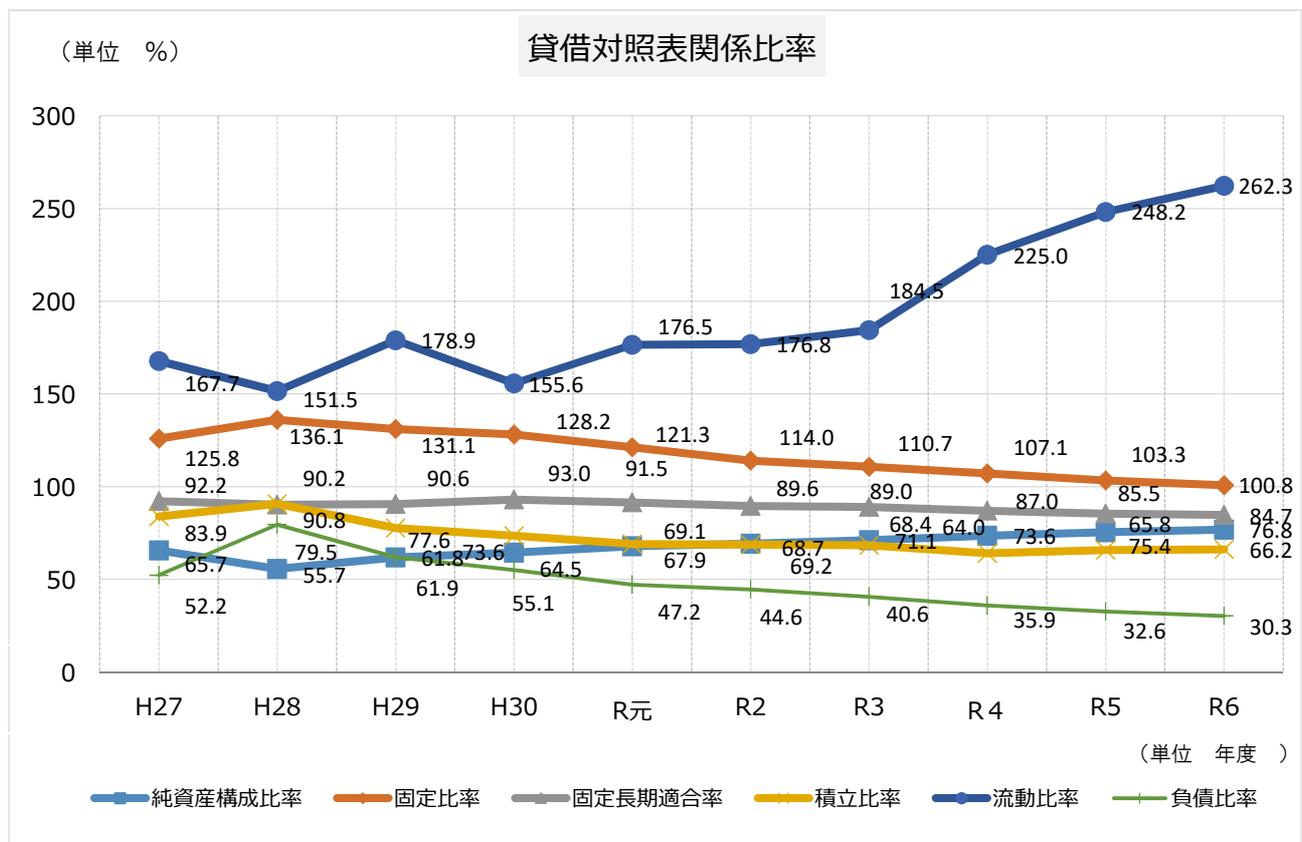
平成26年度と平成27年度は、新会計基準に組替えて表示しています。

貸借対照表関係比率

(単位 %)

分類	比率名	算式	本学園 決算	全国平均	評価 指標
自己資金は充実されているか	純資産構成比率	純資産 ÷ (負債 + 純資産)	76.8	85.7	↑
長期資金で固定資産は賄われているか	固定比率	固定資産 ÷ 純資産	100.8	98.4	↓
	固定長期適合率	固定資産 ÷ (純資産 + 固定負債)	84.7	89.8	↓
負債に備える資産が蓄積されているか	積立率	運用資産 ÷ 要積立額	66.2	61.5	↑
	流動比率	流動資産 ÷ 流動負債	262.3	258.5	↑
負債の割合はどうか	負債比率	総負債 ÷ 純資産	30.3	16.7	↓

評価 ↑ 高い値が良い 全国平均：『令和5年度版「今日の私学財政」高等学校・中学校・小学校編』（日本私立学校振興・共済事業団）
指標 ↓ 低い値が良い





学校法人 鈴鹿享栄学園